
平和

数科 学

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和

【Nコード】

N0163W

【作者名】

数科 学

【あらすじ】

我々は生き延びなくてはならない。なんとしても。

我々には大儀が有る。それは生き延びることだ。

残念なことだが、現代においてこれは容易ではなくなった。

私たちには、確かに天敵と呼ばれるようなものが多々いる。数えられないくらいに。少し昔までは、生き残ることはそれほど難しいことではなかった。しかし、天敵の中でも、特に彼らの進化は著しく、それが困難の元凶にもなっている。彼らにしても、たぶん、情けや容赦、あるいは寛容、それらに代表される広い心を有していたのかもしれない。我々が往来を闊歩しても、その当時の彼らは剥きだしの殺意を向けてくることは無かった。

あの頃がどんなによかったか、我々は先祖によく聞かされた。いまに比べれば、あのころは桃源郷のようであつたと。

見つければ問答無用で撲殺、圧殺されることもあまり無かった。甘い匂いのする化学兵器に惑わされ、兵糧攻めよろしく餓死させられるようなことも無かった。毒ガス兵器で薬殺されることもなかった。

彼らに共通するものは、我々を殺すのは捕食のためでも、快樂のためでも無いということだ。それがほとんど社会の規範であるかのように、我々を、ただ、殺す。そこに憐憫や同情の感情が入り込むことなど前代未聞であり、彼らはほとんど機械的に我々を殺す。

ここまで理不尽な世界に、それでは我々は反旗を翻さずに来たのかと言うと、残念で恥ずかしい話だが、そんなことは不可能だった。まず、彼らとの圧倒的なスケールの違い。

彼らはまごうこと無く巨人だった。我々を踏みつぶし、圧殺することが容易いぐらいには彼らは巨大なのだ。我々が見上げると、彼らはまるで世界樹のようにその丈を蒼穹の彼方へを伸ばそうとしていた。まさに、圧倒、だった。我々には、文字通り、彼らに肩を並べるに匹敵する科学力など持ち合わせていなかったのだ。

次に、彼らの生活圏の拡大にある。

彼らはその生活圏を如実に広げ、我々を直ちに駆逐しようとする。そのため、我々は集結し、決起することが非常に困難になっている。下手に集会など開き、彼らに感づかれでもしたならば、一網打尽に虐殺は簡単に起こってしまう。

最後に、我々は、すでに疲弊しきっている、と言うことだ。

もはや、誰として彼らに対抗しようと言うものはいない。無力を信じ、昨日に感謝し、今日を耐え、ただ明日への希望を繋ぐ。そのため、我々は生き延びなくてはならなかった。

おっと、これはいけない。ついつい話が長くなってしまった。私の悪い癖は、前話が長くなってしまふということだ。毎回その点を反省するのだが、いかんせん、どうしても治る気配が無い。

いま最も重要なことは、彼らの一体、牝と思われるヤツが目前に現れたと言うことだ。

幸い、私は直ぐに物陰に隠れたので、彼女には気づかれてはいない。しかし、私の家に戻るには、彼女の下を直進するしかないと言うことだ。これは、まいった。

私は久方ぶりの食料を小脇に抱えている。いや、もちろん持つてこれるだけ持つて帰れたかった。なにせ、いつ、私が殺されてしまふかわかったものではないのだ。大量の食料をいっきに家族に与え、安泰なときを長く続けたいと切に思うが、そうした場合、持ち帰る前に、確実に私は彼らに殺されてしまう。

それだけは、なんとしても避けたかった。

別にわが身可愛さにいつているわけではない。私は一家の大黒柱なのだ。私が死んでしまったら、誰が食料を調達しに行くというのか。

しかし、彼女はその場に居構え、まるで動く気配が無い。二本の下肢の脚を佇立させ、残った上部の脚でなにやら道具を使っている。合わせて火器も使用しているらしく、頭上高くから熱を感じる。

私は具に彼女を観察した。彼女はどうやら目の前の操作に集中し

ているようで、こちらにまるで気付いていない。今ならいけるかもしれない。意を決して私は飛び出した。

甲高い悲鳴が上がる。女性のそれだ。彼女はフライ返しを床に取り落とし殺虫剤を手にする。彼女が見てしまったもの——ゴキブリが足元をものすごい勢いで横切っていたのだ。怖気に身を焼かれた早く、一刻も早く、瞬時に、この不可解極まる黒いブツを殺してしまわない限り彼女に平穩は訪れない。

フライパンで焦がれる麻婆豆腐に気を払うことも無く、彼女は殺虫剤を思い切り噴霧した。そして必要以上にゴキブリに吹きかける。殺虫の化学成分はゴキブリの体内に侵入すると、神経細胞を丁寧に一本一本繊維をほぐすように切り裂き、彼に八つ裂きの苦痛を与えんとする。しかし彼の頭には激痛を感じず脳領域がなかった。たとえそれが人のものであったとしても痛みは一瞬であつたろう。痛みを知らないまま、彼は永遠の眠りについた。最後の瞬間に見たものは、黒ずんだ娘と妻の顔だった。

ゴキブリが仰向きになり、その生命の活動をやめると女性は安堵の吐息を漏らした。

それから女性は裏返るゴキブリの処分を済ませると、少なからぬ殺虫成分が混入したであろう麻婆豆腐の扱いに、頭をもたげるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0163w/>

平和

2011年8月22日03時18分発行